

論文

狂人の誕生

—明治期の「狂人」言説と魯迅の「狂人日記」—

李 冬 木

〔抄 録〕

これまでの「狂人学史」においては、「狂人」言説自体を作品の人物精神史の背景として検討する研究が欠如していた。本論は「狂人」の用法、社会のメディア状況、「ニーチェ」、「無政府主義」、文学創作及び時代精神の特性など複眼的視点から、「狂人日記」誕生の以前に「狂人」の言説史が存在したことを確認し、この状況を前提として「狂人」誕生の足跡を考察した。また周樹人は「狂人」の雛形を携えて日本から帰国したが、この「狂人」は彼自身を形成した過程でできあがったもので、いわば彼の記憶にある「真の人間」と血を分けた兄弟であったと考える。「狂人」の誕生は、「真の人間」の誕生の必然性を宣告したもので、「狂人日記」は本質的に「人」の誕生を宣言した作品であったと結論づけた。

キーワード 狂人言説、狂人日記、魯迅、ニーチェ、真の人間

一. 緒言 「狂人」誕生の足跡を探し求めて

今を隔てること100年前の1918年、雑誌『新青年』4巻5号において「魯迅」と署名された短編小説「狂人日記」が発表され、中国現代文学に初めて象徴的人物、つまり「狂人」を擁する作品が世に送り出された。これにより魯迅と呼ばれる作家が誕生した。こうした解説は文学史においては常套的なものとなっている。

では、「狂人日記」は「今日」に対してどのような意義があるのか。これは百年の「狂人学史」が一貫して探求してきた問題であり、今後も引き続き探求し続けられるテーマであろう。本論は「狂人日記」誕生百年という節目において、「今日」的観点から「狂人」を考察した結果を提示し、各方面に教えを乞うものである。

本論が提起する問題の所在は、「狂人日記」の「狂人」は如何に誕生したか、ということにある。換言すれば、この「狂人」には果たして「前世」があったのかという問いになる。これ

は具体的には「狂人」はどこから来たのかという問題である。歴史家の言うところの、「狂人」というこの奇特で怪奇な文学形象が誕生し、中国の精神界全体を震撼させ、五四文化革命の初めての春雷となった⁽¹⁾であろう。また、「狂人」誕生以来の「現世」は、読書史であると同時に、震撼史であり、中国精神界に巨大な波紋をもたらし、今に至るも少しも弱まっていないと言えるであろう。本論はこうした問題意識のもと、上述の問題を提起するものである。

作品の構成から言えば、「狂人日記」には二つの核心的要素がある。一つは「喫人」のイメージであり、もう一つは「狂人」のイメージである。そして「狂人」が「喫人」を告発するのである。この「喫人」というテーマが形成される前には、長い「食人」の言説史があり、それが道筋となっている以上⁽²⁾、これと同様に「狂人」の誕生にも「狂人」に関する言説の背景が果たして存在するのかという問いを設定するのが自然であろう。先行の研究者による研究には、つとに周樹人の留学時代と「狂人日記」の内的な関連に着目し、考察したものがある。例えば伊藤虎丸(1927-2003)、北岡正子(1936-)、中島長文(1938-)、劉柏青(1924-2016)等の学者の行った創造的な貢献は、「周樹人」がどのようにして「魯迅」に到ったのかという問題の架け橋を提示しただけでなく、国境を越え、更に広範囲の近代思想の文化的背景を現出させた。本論ではこうした優れた基礎の上に、「狂人」に対する言説の整理し、そこから更に一步踏み込んで周樹人周辺の「狂人」現象と本人及びその作品の関連を考察する。そして「狂人」のイメージが形成されるメカニズムを探り、研究の空白部分を補填しつつ、「狂人」自体を作品人物の精神史の一つの背景としていきたい。

本論では「狂人」の用法、社会のメディア状況、「ニーチェ」と「無政府主義」などの言葉とその受容、文学創作及び時代精神の特徴など複数の視点からこの背景の存在を明らかにし、「狂人」誕生までの足跡をたどっていきたい。

二. 「狂」の用法と「狂人」言説

まずひとつの前提として、「狂人」言説は果たして存在するのかという問いを立てたい。答えはもちろん「存在する」である。

筆者は周樹人及びその周辺の関連する明治の文献を調査した時、しばしば「狂」の字を目にすることがあった。例えば、「狂」、「狂気」、「狂人」、「狂者」、「発狂」、「狂奔」のたぐいであり、当初は注意を払わなかったが、その後、これらの語句の用法には特定の範囲と文脈があり、特定の人物、事件、物事、思想、及び文学創作に関係しており、さらに特定の言語空間の言説を構成していることに気づいた。つまり「狂人」言説は、客観的には存在していたにもかかわらず、これまで発見、整理されていない状態であったのである。

言葉の点から見ると、「狂」は中国のかなり古い文献にも用例が見いだせる。甲骨文字にもつとに「狂」字(甲六一五)があり、許慎『説文解字』にも「狂は狢犬なり」と説解されてい

る。それは狂った犬のことで、のちに人にも転用されるようになり、「精神に異常を来した、狂った、ぼんやりする」などの意味から、ひいては「傲慢、軽率、放蕩、放埒、荒々しさ、性急さ」などという意味に敷衍していった⁽³⁾。『康熙字典』⁽⁴⁾や『辞源』⁽⁵⁾などにも『詩経』、『楚辞』、『尚書』、『左伝』、『論語』などの用例が列挙されており、これらは必ずしも最も早いものではないが、これらから古くから用例があったことがうかがえよう。たとえば李白の有名な詩句「我は本、楚の狂人、鳳歌して孔丘を笑う」⁽⁶⁾から数えても、今より1250年余り隔たっている。「狂」字は、語幹として強力な造語能力を有しており、大量の「狂」に関連する字句を産出している。例えば、諸橋轍次の『大漢和辞典』には、「狂」を語頭とする字句だけでも160語が収められており⁽⁷⁾、『漢語大詞典』では240語が収録されている⁽⁸⁾。これは中国語ではさらに大量の「狂」を含む語彙が存在していることを意味しており、日中間で「狂」の字句を共有している例を見出すことも容易である。つまり「狂人」言説はこれらの言葉の上に構成されているのである。

明治期までで言えば、日本語の「狂」を含む語彙は、基本的には中国からもたらされたものである。例えば、「狂人」、「狂士」、「狂者」、「狂子」、「狂生」、「狂父」などの言葉は「和製漢語」⁽⁹⁾と見なされていない。しかし、このことが空前の規模で造語が作られていた明治期に「狂」字が全く無関係であったということの意味するものではない。例えば瘋癲病院 [フウンテンピョウイン]、偏執狂 [ヘンシュウキョウ]⁽¹⁰⁾などはこの類の言葉である。井上哲次郎 (1855-1944) などが編纂した『哲学字彙』は日本近代史上で初めての哲学辞典であり、明治期に三度版を重ねており、明治の思想文化を考察するうえで重要な文献である。その1881年の初版には、「狂」の含まれる言葉が5語しか収録されていない⁽¹¹⁾、1911年の第三版では、「狂」の含まれる言葉は64語に増えておいる。[愛国狂]、[珍書狂]、[魔鬼狂]などがその例であり、例えば [妄想]、[誇大妄想]、[虚無思想]、[被害妄想]、[健忘] など更に関連する精神状態を表す言葉を加えると、新たに増えた言葉はおよそ100近く数えられる⁽¹²⁾。ちなみに新たに増えた漢字語彙はすべてが創作という訳ではなく、[疎暴、疎狂、鄙野、固陋、獷獐、魯莽、狷獷、麇鹿]⁽¹³⁾といった古語に典拠を求められるものもあり、これらは Rudeness という言葉の対訳として用いられた。

その他の近代の新語と同じように、「狂」に関する言葉も大幅に増え、これは明治の日本がヨーロッパ思想を吸収した速さと範囲の広さを表している。それと同時に、この「狂」という精神現象に対する認識が日々深化、専門化し、言葉の使用範囲も広範囲に広がっていた。明治30年代の終わりには、すでに日本語の系統で「狂」を一種の精神現象と見なし、加えて認識の形成と議論の基礎となる語彙となっていた。ここには少なくとも二つのレベルの意味合いがある。一つは大量の新語 (ただ「狂」の字を使用した言葉だけではない) の創造と広範囲の使用は、本文で検討する「狂人」言説を可能にしたということ。もう一つは「狂人」言説が以前とは異なった近代性を有していたことである。

しかし、さらにもう一つ指摘しておかなければならないのは、上述の『哲学字彙』の領域には「医学」が含まれていないということである。もし医学生が当然接触するであろう医学用語の「狂」に関係する言葉を考慮すると、一個人として、彼には「狂人」言説に介入するだけの素養と資格を有していたことを意味している。

魯迅が後に「狂人日記」を語った時に述べた「おおよそ、頼みの綱としたのは、以前に読んだ百余篇の外国作品とわずかな医学上の知識」⁽¹⁴⁾という文章の、「わずかな医学上の知識」とは、すなわち上述した語彙の範囲内で獲得したとみるべきで、当然それは当時の医学生が修めるドイツ語と日本語の対訳も含んでいた。これはその当時の藤野先生が改めた医学ノート⁽¹⁵⁾の中の言葉から、容易に推測される。これにより、「狂人」言説に関係する段階から言えば、周樹人は明治期の日本で使われていた語彙と同一の語彙を共有していたのである。

三. 社会生活レベルに見られる「狂人」言説

一般の社会生活のレベルから言えば、「狂人」に関する語彙と語句は、どのような状態であったのか。

上述したように、当時の日本には大量の「狂」と「癲」を含む漢語語彙は既に入っており、日本語に同化し、日本の各典籍や作品の中に使われていた。例えば「狂人走れば不狂人も走る」などは、当時はありふれた諺で、その意味は「気のふれた人が前を走ると、普通の人もそのあとに従う」となろう。これは、人はいつも他人に追随して、付和雷同しがちであることを喩えている。この諺はつとに文集『沙石集』(1283年)、謡曲『関寺小町』(1429年前後)や俳諧『毛吹草』(1638年)⁽¹⁶⁾に見られる。さらに江戸時代の国学者である本居宣長(1730-1801)は、「狂人」を冠した書物『鉗狂人』(1785年)⁽¹⁷⁾を著している。この書物は、藤貞幹の『衝口発』に対する反論の書であり、その後、日本国学史上の重要な文献となった。長い間、日本語が漢語の「狂」に関する語彙をどのように吸収したのか、遙か往事のことであることや、膨大な書籍があったことが原因で、確定することができなかった。しかし、明治十二年(1879)から明治四十年(1907)、明治政府が千巻以上に及ぶ百科全書『古事類苑』を編纂し、日本の歴史が積み重ねてきた様々な知識に対して全面的な統合と整理が行われた。例えば、この書物には「癲狂」の項目がある。

〔倭名類聚抄 三病〕

癲狂唐令云、癲狂酗酒、皆不得居侍衛之官、本朝令義解云、癲發時、臥地吐涎沫無所覺、狂或自欲走、或自高稱聖賢也⁽¹⁸⁾。

続けて「癲」の由来と「狂」字の解釈が、歴史的、文献学的考察がなされている。畢竟、この二つの字は単独で使用されようとも、熟語として使われようとも、「病気のことを言う」のである。また「癲狂」と「狂人は同じ」と特記してある⁽¹⁹⁾。同時に大量の症状の表現及び

『沙石集』、『源氏物語』など歴代の典籍と作品の狂人の事跡を集め、『癩病総論』⁽²⁰⁾を付け、まさに「狂」事大全ということができよう。つまり、この本を編纂した時期の日本語では、「狂」、「癩」、「癪」という漢字はすでに精神病を指すとみなされていた。つまり明治期の「狂人」言説には、こうした基礎知識に裏打ちされた前提があったのである。

近代のメディアの出現と発達は、「狂人」言説を近代におけるテーマとして、最初に社会伝播のレベルで確立させた。当時の代表的新聞である『読売新聞』と『朝日新聞』の記事を例にとってみよう。1874年11月2日に創刊した『読売新聞』は、1919年の末までに限ると、100件⁽²¹⁾を超える「狂人」に関する報道をしている。1879年1月25日創刊の『朝日新聞』は1919年7月16日朝刊第五版の「狂人巢鴨医院から逃走」⁽²²⁾の報道までに限ると、「狂人」に関する報道は540件にも及ぶ。さらに報道数の増加の趨勢を見てみよう。『朝日新聞』の明治10年代と20年代(1879-1897)の18年間の報道数は140件⁽²³⁾であるが、明治30年代(1898-1907)は一気に208件⁽²⁴⁾にまで増えており、前の18年間の1.5倍になっており、明治40年代ではわずか4年半の報道数が144件⁽²⁵⁾にまでなっている。この後、1919年の年末の大正時代(1912-1925)の7年半には僅か48件の報道しかなかったこと考慮すると、一つの明確な結論が得られる。つまり「狂人」が新聞などのメディアを通して社会の表層の話題となったのは、明治30年から40年代の15年間に集中している(『読売新聞』も同じような状況である)のである。この調査の結論は、大衆の言葉の側面から筆者の先の一つの基本的な推測に証拠を提供している、即ち「狂人」は一種の言説として、おおよそ明治30年代前期には形成され、明治30年代後期ないしは明治40年代には広まっていた。これを中国の歴史的イベントに照らすと、ちょうど戊戌の変法から辛亥革命の十数年にあたり、20世紀の最初の10年を含んでいる。周樹人が日本に留学した7年半(1902-1909)も、まさにこの時期に相当する。

ではメディア空間で出現した「狂人」とはどのような存在であったのか。報道の内容から分類すれば、以下のことに気づくであろう。それは絶対多数が狂人の行動、事件に関する報道であり、メディアの「狂人」は精神病患者であり、俗に言う「気がふれた人」となる。彼らは傷害、殺人、放火、窃盗、逃亡、横死やでたらめ、ひいては奇怪な行動の中心人物であり、同時に医学的治療の対象でもある。彼らの姿は精神病院、病院や監獄に現れるだけでなく、総理大臣官邸や貴族の邸宅、文部省などの役所や警察署などにも現れる。そして、重要な場所で大騒ぎをする中心人物であり、彼らの行動に伴って最も多く登場するのは警察である。警官は、往々にして手をこまねいており、酷い時は彼らから暴力を受けてしまう。つまり一般大衆の言説の「狂人」と『古事類苑』の「狂人」が担っているもの、例えば「幼者狂人放火」⁽²⁶⁾「瘋癲者犯罪」⁽²⁷⁾「狂人犯罪」⁽²⁸⁾「狂人愚昧者犯罪」⁽²⁹⁾の類の行動とは大きな違いはなく、どちらも「気がふれた人」という範疇に属している。これが以前と異なっている点は、「狂人」の存在が普遍化し、問題となり、一般社会が注目する対象となり始め、公共の言語空間に入った言説となったことである。

書物における「狂人」の出現は、新聞よりも一歩遅かったが、増加の趨勢は同じであった。それについて後述する為、ここではこれ以上触れない。つまり、1902年に来日した周樹人にとって、「狂人」は耳になじんだ日常の話題でなかったとしても、少なくとも全く知らない話題でもなかったはずである。「狂友」を収録した宮崎滔天 (1871-1922) の名著『狂人譚』が、周樹人が横浜に上陸したその年に出版されていることがその一例である⁽³⁰⁾。

四. 「ニーチェ」と「狂人」言説

明治33年即ち1900年、ドイツの哲学者、文明批評家、詩人でもあるニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) が死去し、翌年の明治34年 (1901)、日本で「ニーチェブーム」が巻き起こった。端的に言えば、この「ニーチェブーム」は「美的生活論争」から引き起こされた。1901年評論家の高山樗牛 (1871-1902) は「文明批評家としての文学者」と「美的生活を論ず」⁽³¹⁾二編の文章を発表し、「文明批評」と「人間性が本来要求する」「美的生活」を追求することを展開、主張し、これにより論争が引き起こされた。高山樗牛は前の文章で「ニーチェ」の名前を挙げ (ただ名前挙げただけだが)、更に彼の援軍の登張竹風 (1873-1955) が駆けつけ、「高山君の『美的生活論』は疑いもなくニーチェの説を根拠にしている」⁽³²⁾と宣言し、「ニーチェ」をこの論争に巻き込み、その中の焦点の一つとした。「ニーチェ」はあたかも巨大な渦のように、様々な問題を巻き込み、様々な言説やことばを攪拌させた。その中で、最も顕著なものは、「ニーチェ」の登場と相伴って出現した「狂人」の言説である。

「ニーチェ」は「気のふれた人間」として、日本の思想界に現れたと言ってよい。「発狂する」という言葉は、彼みずからが付けたレッテルである。「ニーチェ」が最も早く日本に伝わったルートの一つが、1894年に医学博士の入沢達吉 (1865-1938) がドイツから持ち帰った哲学書であるとされる。同年、同じように医者で且つドイツに留学したことのある森鷗外 (1862-1922) が彼からその書物を借りて読んだが、結局どのような著作だったのかは、はっきりしない。ただ森鷗外が友人に宛てた手紙の中に「ニーチェ」に関する僅か数語が残されており、それが「ニーチェ」が彼に残した最初の印象、「ニーチェは最もすでに発狂している」⁽³³⁾を現している。1899年1月に発表した吉田静致 (1872-1945) の「ニーチェ氏の哲学 (哲学史上第三期懷疑論)」と同年8月に発表した長谷川天溪 (1876-1940) の「ニーチェの哲学」の二本の論文が最も早く「ニーチェ哲学」を公に紹介したものであるが、期せずして「ニーチェ哲学」と彼の「癡狂」或いは「心狂」が関連づけられて紹介された。前者の「ニーチェ」は「偉大な懷疑論者」だが、「聞く彼は當時癡狂症に罹り居ると」⁽³⁴⁾した。後者では「ニーチェ」に対し実に同情的であり、「彼を以て一狂者なりと見做」⁽³⁵⁾したくないが、「其激烈なる活動、狂奔せる思想の流は、遂に此人の精神組織に影響を及ぼし……其心狂うてエーナの瘋癲病院に幽閉されたり」⁽³⁶⁾としている。

ここで最も提起すべきは、桑木巖翼 (1874-1946) が1902年に出版した『ニーチェ氏倫理説一斑』⁽³⁷⁾である。この書は「超人」を「精神病院」と関連づけて紹介している。「自分で天才であるなどと自覚したら、この関点の多い人間でありながら、自分免許で天才や超人となつたなら、気の毒な事には彼は最早癡狂院の一客とならねばならぬ。かような實際ない超人も一種の詩としては興味があるが、人生の理想としては、割合に価値のないものであると思ふ」と断じている⁽³⁸⁾。桑木巖翼は明治26年 (1893) 東京帝国大学文学部哲学科に入り、東大でニーチェを祖述したドイツ人教授のラファエル・フォン・ケーベル (Raphael von Köber, 1848-1923) と東京帝国大学の主任哲学教授の井上哲治郎の高弟となり、本を出版したこの一年には既に東京帝国大学文学部の助教授に昇任していた。当時最も詳しくニーチェを語る資格を持った学者の一人であり⁽³⁹⁾、その言論の影響は言うまでもなかった。「ニーチェ」に関する著述におけるその描写は、婉曲的であったが、「学術的」であった。しかし「超人」を気のふれた人間と見なしていたに違いない。更には、直接ヨーロッパの「精神病学」の方面の最新研究成果を即座に導入し、それをもって「ニーチェ」を評価した。それが1903年4月12日に『読売新聞』に発表した「精神病学上よりニーチェを評す (ニーチェは癡狂者なり)」⁽⁴⁰⁾である。『読売新聞』のこの文章は、「1902年、パウル・ユリウス・メービウス (筆者案ずるに、ドイツの精神科の医師、Paul Julius Möbius, 1853-1907) が『ニーチェにおける精神病理的なものについて』というセンセーショナルな病跡学研究を発表した。今日の医学水準からいってほとんど信憑性を失っているが、当初、影響力の甚大な一書であった」⁽⁴¹⁾と、この書物の内容に対する全般的な紹介をしている。

多くの口は金をも溶かすように、ニーチェは「気のふれた人間」になってしまった。僅か数年の間で、「ニーチェ」はこのように新聞、雑誌や著書を通じて紹介、評論され、社会的言語、思想学術、精神医学など各レベルで「狂人」を形作った。このことは生田長江 (1882-1936) に深い印象を残すことになった。彼は日本で最も早く『ツアラツストラはかく語りき』の翻訳に着手した人物であり、後の『ニーチェ全集』の日本語訳者であったが、この明治30年代の「ニーチェブーム」では、いわば「遅れてきた青年」⁽⁴²⁾であった。彼は明治36年 (1903) に東京帝国大学文学部哲学科に入り⁽⁴³⁾、桑木巖翼から遅れること十年を経た同門であり、彼がこの一年で見た情景は「ニーチェはまだ理解されておらず」、熱気は既に過ぎ去り、ただ「狂人」のレッテルを残すのみであった⁽⁴⁴⁾。これにより、ほとんど生田長江と同年齢で、ほとんど同時に東京で学問を求めていた周樹人にとって、「ニーチェ」の第一印象は、先学達が指摘した「積極的人間」、「文明批評家」、「本能主義者」⁽⁴⁵⁾というよりはむしろ、「狂人」「ニーチェ」が近いものであったであろう。

前に紹介した一般社会における「狂人」言説を通じて、以下のことがわかる。「狂人」というレッテルが貼られたことは、ただ単に残酷な非難であったというだけでなく、社会に押しつけられ、瀬戸際に追われ、更に追い込まれていたことを意味している。これにより、ニーチェ

は「狂人」であるという理由で攻撃され、「狂人」はニーチェの価値を否定する者たちの強力な武器となった。

客年ニーチェの異説一たび論壇に現るゝや、軽佻浮薄なる文学は、其奇矯の辞激越の調を喜び、或は之を以て本能主義と同視し、或は之を以て自然主義と結合し、或は之を以て快楽主義と解釈し、甲難乙駁底止する処なかりき、

されど当時虚心冷頭なる、識者は、窃かに彼が詭弁弁説を忌み、是れ果して健全なる思想の産物なるか疑わざるを得ざりき、

果然ニーチェは医学上一狂者として知らるゝにいたれり⁽⁴⁶⁾

このような状況で、文壇の老將軍で著名な坪内逍遙 (1859-1935) は、匿名で「馬骨人言」の題名で、嘲笑するかのよう、「ニーチェ」とそれに追隨する人間を攻撃した。彼は同表題の文章を一気に31の書き、『読売新聞』に24回⁽⁴⁷⁾連載した。そこで「ニーチェ」は明治の主流のイデオロギーの領域において、特に社会と世論の中において、すでに評判が悪く、たとえ人が彼を「天才」であると弁護しようとも、それは「似面非天才」、「贗天才」、「疵天才」、「屑天才」、「汚天才」、「狂天才」、「病天才」、「偏天才」、「歪天才」、「畸天才」、「怪天才」(いっそのこと「変人」かも?) にすぎない。さあゝ、選取るつたゝとした⁽⁴⁸⁾。

では、「ニーチェ」に関する論争において、「狂人」を弁護する人間は現れなかったのであろうか。答えは、現れたのである。ただその勢力は弱く、「瘋狂」論に抵抗できなかった。「美的生活論争」を担った高山樗牛その人だけでなく、この論争の火種を「ニーチェ」に向けた登張竹風及び当時留学地のドイツから声援を送った姉崎嘲風 (1873-1949) も、彼らの論争そのものは思想界に巨大な衝撃をあたえたが、彼ら自身は少数者のほか、彼らが直接「狂人」のために弁解した言論も極めて少なく、ただ彼らの殿の齋藤信策 (1878-1909) が、1904年11月に発表した長文『天才と現代の文明』で「天才崇拜の意義を明かにす」⁽⁴⁹⁾が初めての真剣な回答であった。

つまり、「狂人」が一種の言説となり、「ニーチェ」の登場に伴って明治のエリート階層が思想問題を討論する言葉となり、それと同時に「ニーチェ」も独自で特徴的な表象となった。これにより、「狂人」をいかに理解、認識したかということが、とりもなおさず「ニーチェ」に対する理解と把握であるということまで及んだ。既にわかっている鲁迅の「ニーチェ」、「狂人」に対する総合的認識に基づけば、明らかに上述の「ニーチェ」と「狂人」のイメージには大きな齟齬がある。では彼はどのようにして世間と世論が作り出した認識と混乱を克服し、自分が把握し得たあの「ニーチェ」像に到ったのであろうか。

五. 「無政府主義」と「狂人」言説

明治30代の「無政府主義」という言葉も「ニーチェ」同様、「狂人」の言説をさらに強化し

た。

19世紀の80年代以後、ヨーロッパ各国、特にロシアでは「虚無党」や「無政府党」の動きが活発化し、しばしばヨーロッパとロシアで騒乱を引き起こし、これに関する明治期の言説も、ヨーロッパやロシアの状況に対して日本政府と社会が注意を促し、報道することと密接に関係していた。明治35（1902）までで統計をとると、1880年2月22日から1901年10月21日までの『読売新聞』誌上におけるヨーロッパとロシアの「虚無党」に関する報道は55件、「無政府党」に関する報道は29件、合計84件であった。ほぼ同期間の1880年2月29日から1902年7月29日までの『朝日新聞』の報道では、欧露の「虚無党」に関する報道は140件、「無政府党」に関する報道は16件、合わせて156件であった。つまり、20年余りにわたって二紙が報道した「虚無党」と「無政府党」の記事は、合計240件にもものぼる。その内容は主として「虚無党」の人間と「無政府党」の人間の暗殺、爆破、暴動などテロ活動及び各国政府特に帝政ロシア政府の彼らに対する取り締まり、鎮圧、駆逐と処刑であり、これらの人に与える印象は前者は皇帝と政府を敵とする殺人、放火、悪の限りを尽くす犯罪集団であり、後顧を考えない命知らずの輩と精神錯乱分子であるというものであった。

「虚無主義」(Nihilism)と「無政府主義」(Anarchism)は本来、異なる意味をもつ概念であり、それらが日本で紹介された順序も異なっていた、前者はつとに1881年初版の『哲学字彙』に存在し、「虚無論」⁽⁵⁰⁾と訳され、1911年第三版にはさらに「虚無主義」乃至「虚無論者(Nihilist)」⁽⁵¹⁾の漢字が対訳されている。その一方で、「無政府主義」は『哲学字彙』第三版にも収録されていない。しかし明治2、30年代の言葉の具体的運用において、「虚無主義」と「無政府主義」、「虚無党」と「無政府党」は同義で、ほとんど互換が可能であった。1902年4月『近世無政府主義』⁽⁵²⁾という日本で初めての「無政府主義」に関する専門書が出版され、その作者の煙山専太郎(1877-1954)は『序言』で「無政府主義」と「虚無主義」の関係について以下のように説明した。

現時に於ける無政府主義と露国の虚無主義とは、その間の性質稍々異なる者あり。然れども此二つの者は近時革命主義(余輩は敢えて之を社会主義とは云わず)の最も極端なる形式として発展し来たる者にして、或意味に於いては虚無主義を以て包括的な無政府主義の一特殊現象と見做すも敢えて不可なかるべきを信ずるが故に、此処には便宜上共に之を近世虚無主義なる題目の下に列したり。読者の之を諒せられんことを望む⁽⁵³⁾。

これは当時としては画期的な著作であり、「無政府主義」に対する恐怖と憎悪がもたらす偏見を解いた。「本編純粹乎たる歴史的研究により、此妄想者熱狂者が如何にして事実として現社会に発現し来りたるや。その淵源を明にせん」とし⁽⁵⁴⁾、それ故、後世の人間に「邦訳で出版された無政府主義の研究書としては唯一といってもよいまとまった労作であった」⁽⁵⁵⁾。そして「アナキズムの情報面では質量ともにはるかに優れたものであった」⁽⁵⁶⁾と評された。

この著作は同時代の日本の社会主義者の幸徳秋水(1871-1911)と無政府主義者の久津見蔵

村 (1860-1925) に影響を与えただけでなく、——この二人も同時に中国に影響を与えた——更に中国の清末民初の思想界に大きな影響を与えた。管見の範囲だけでも、同時期の中国言論界で、煙山専太郎の『近世無政府主義』を基にした文章と著作は18種以上に及ぶ⁽⁵⁷⁾。

煙山専太郎の多大な貢献には、とりわけ二つのことが顕著である。一つは「無政府主義」の二つのタイプの区分であり、もう一つは区分した中で「シュティルナー」と「ニーチェ」を突出させたことである。

先ず、「無政府主義」は大きく「実行」と「理論」の二つに分けることができる。暴力を行使する手段は世間に恐怖をもたらし、広く関心を引き起こすということを主要なものとするのが前者の「実行」であり、それは「実行的無政府主義」である。しかし彼はイタリアの犯罪学者で精神病学者のチェザーレ・ロンブローゾ (Cesare Lombroso, 1835-1909) の有名な観点には同意せず、社会通念の観点、即ち「実行的無政府主義」者を病の原因を有する精神病患者と「狂者の一種」と見なした。だがこれが誤謬に陥れたと要因と考えられる⁽⁵⁸⁾。これにより、彼は自らの著書においてこの種の無政府主義者を、通常の「熱狂的」或いは「熱狂者」として描写し、これにより無政府主義者の身に生まれながらの「狂人」の汚名を効果的にすぎ、彼らを「狂人」の列から選り分けることで「狂人」言説の主張を客観的に強化した。

またこれだけでなく、彼はさらに大幅な紙面を費やし、「理論的無政府主義」として「シュタイナー」と「ニーチェ」を詳しく紹介した。そして前者を「近世無政府主義の創始者」の一人と位置づけ、後者を「近世無政府主義」の代表とした。蚊学士「無政府主義を論ず」には、「スチルネルの言説は絶対的の個人主義なり」⁽⁵⁹⁾とある。また「之に反して我性は我々に向て叫で云ふ、汝自身に蘇れと。我性は生まれながらにして自由なる者なり。故に先天的に自由なる者にして自ら自由を追求し、妄想者、迷信者の間に伍して狂奔するは、正に己を忘る、者なり」⁽⁶⁰⁾とある。そして「スチルネルの奇矯なる此新説は恰も燦爛なる花火の一時に発」するとある⁽⁶¹⁾。また煙山専太郎は雑誌『日本人』で2ページに渡りシュタイナーを紹介し⁽⁶²⁾、さらに著書でも9ページの紙幅を使い⁽⁶³⁾、この文章は日本の同時期で最も詳細で完成され正確なシュタイナーの評論となった。一方、ニーチェに対する紹介は更に多く、雑誌『日本人』で何度も言及されたほか⁽⁶⁴⁾、『近世無政府主義』では14ページの紙幅が割かれた⁽⁶⁵⁾。そこでは「ニーチェの学説は純粋な哲理性の無政府論と見なすことが出来る」⁽⁶⁶⁾、また「晩近の思想界に於て一種特異の光彩を放ちつゝある者をニイチェの哲学とす。……ニイチェの学説は決してそれが社会改革の動機より出でたる者に非ずして純然たる理論上より立せられたる者なり。此点に於ては個人主義たるマクス・スチルネスと全く其立脚地を一に」し⁽⁶⁷⁾、吾人は之より少しく彼の主張に付て観察する所あらんとす⁽⁶⁸⁾。——ニーチェに関する紹介は、このような前置きから始まった。煙山専太郎は同時期に発生した「ニーチェブーム」の論争に参加しておらず、のちに出現した日本ニーチェ学史においても彼の名は見られない⁽⁶⁹⁾。しかし今日的な観点で見ると、「ニーチェ」が流行した当時において、はっきりと支持ないし反対して旗幟鮮明にした

「ニーチェ」論と比べると、煙山専太郎の「ニーチェ」論だけが最も明晰にニーチェの思想上の位置とその価値を見出していたといえる。

夫れ一方の極端説に対して他の反対説出て、而して其兩者の相調和進行することによりて人文の発展するはこれ実に自然の経路なり。人世豈に夫れ絶対的の者あらんや。衝突し、調和し、駿々として苟くも止むとなし、其間に於て云うべからざる意味の存するあるなり。所謂実行的無政府主義者の求むる所は其理想を直に刻下に実現せんとするにあり。其順序を誤れる、豈に敢て知者を俟て後初めて知るべき所ならんや。然れども徒に彼等の主張を排斥し、狂者の空言を以て之を遇するはこれ又た不可なり。彼等の大呼唱達する所はたしかに其據る所の之あるを見ればなり。……個人主義より出でたるスチルネルや、ニエチエや、将たハーバードの無政府主義はこれ豈に極端なる自我中心説にして、引て意志の自由を推量し、我性の発揮、本能の自由を唱へ、遂には一切我以外の権力を否認せんとするに至りたる者に非ずや。……ニエチエの利己的哲学が一代の思想界を動かし、多数の学徒を世界至る所に有するに至りたるは其後者なるが為なり。夫れ進歩の動機は理想が人心を衝動するの故なり。理想の追求せらるべきなく、營々として現実世俗の物質に拘泥す、何へにか進歩の遂げらるべきあらむや。遠く慮り、深く謀り、現実の事物を修正改善して徐ろに己が胸中の理想国に近づかしめんとする、洵にこれ志ある者の窃に以て計画するべき所にあらずや⁽⁷⁰⁾。

魯迅の文章を熟知している人からすれば、上述の話から既視感を催すかもしれない。しかし「狂人」言説の問題の角度から見ると、煙山専太郎は實際上、「シュタイナー」と「ニーチェ」の解釈と通じて、「狂人」の価値を反転させる役割を果たした。「狂人」の言は、所謂「瘋言瘋語」で理解できるものではなく、「彼等の大呼唱達する所」は、「確かに根拠があっただけでなく、その「人心を衝動」した理想は人類の進歩の価値を押し上げた。もし誰かの気が狂ったのなら、それはまさに「シュタイナー」の言葉を借りれば、「先天的自由者は自分で自由を追い求め、妄想者と迷信者とで隊を成して狂奔し……、自己を忘却する」人となるのである。徹底した個人主義者からすれば、本当の発狂とは「自己を忘却して」耐えられない状況なのであろう。この種の価値の転換の認識と肯定の痕跡も、忠実に記録され、「令飛」すなわち当時の周樹人が1907年に書いた『文化偏至論』⁽⁷¹⁾には、いわゆる「外的原因」と「内的原因」という言葉として表現されている⁽⁷²⁾。

つまり、「ニーチェブーム」の「狂人」がマイナスのイメージで表に出てきたのとは異なり、「無政府主義」という言葉には、「狂人」は肯定的な「シュタイナー」と「ニーチェ」の意味を付与され、そして「狂人」は創造性を有する、独立した個人という一種の「おくり名」（「個人主義」を「利己主義」に分類したように）を冠して世に出てきたのである。これにより「狂人」は肯定的意義という新属性を有することとなった。

煙山専太郎が区別した「無政府主義」の二つの類型と「狂人」に対する肯定的価値は、後の

論者にも踏襲されていった。例えば久津見蕨村は4年後の1906年11月に出版した『無政府主義』において、章立ての区分だけでなく、叙述の方法と内容にも明らかに煙山をトレースしている。例えば「実行的無政府主義と理論的無政府主義」⁽⁷³⁾のといったたぐいの用法は言うに及ばず、ロンブローゾを批判し、「狂人」を擁護することも煙山に近づいている⁽⁷⁴⁾。彼は更に「ニーチェ」を擁護して以下のように言う。

或は彼れの性格が常人と異なり、奇矯の言行多く、遂に発狂して死せるの故を以て、彼れの論ずる所は狂者の言なり、採るに足らずと云うものあり。然れども天才と狂者とは相距一步の差のみ。……彼れ好し狂者にても可なり。人を以て言を捨つ可らず。彼れの設ける所にして狂ならず愚ならず、真理を語るあらば之を採るに於て何ぞ遲疑を要せんや⁽⁷⁵⁾。さらにのちの大杉栄(1885-1923)『正気な狂人』(1914年5月)になると、この「狂人」はすでに「俯仰不屈、何事にも屈せず、「最高の山頂までもよじ登れる」⁽⁷⁶⁾ほどの明晰で健全な「狂人」に変化している。

生の最高潮に上りつめた瞬間のわれわれは価値の創造者である、一種の超人である。僕はこの超人の気持ち味わいたいのだ。そしてみずからこの瞬間的超人を経験する度数の重なるにしたがって、一步一步、この種の超人となる資格が得たいのだ⁽⁷⁷⁾。

つまり大杉の見方は、「狂人」は理想的人格の体現であり、それによりこの「狂人」は明晰で、勇敢で、健全で、超越的な存在であった。衆知の通り、周氏兄弟は大杉栄の愛読者であった。

六. 文芸作品と評論における「狂人」

以上のように社会レベルと思想レベルで「狂人」を見てきたが、総体的に見ると、明治期に「狂人」言説を伝播拡散した最大にして有力なルートは文芸作品であった。「狂人」が文学作品と評論に頻繁に登場したのは、明治文学の顕著な現象であったと言える。わずか20世紀に入ったばかりの20年間に出版された「狂人」に関係する書物を例にとると、「文学分類」に属する図書は、1900年から1909年の37の図書、15種類があり、1910年から1919年では69の図書、42種類⁽⁷⁸⁾にも及んだ。

さらに遡ると、「狂人」が「文芸」という言葉の範囲においてその痕跡があることを発見できるであろう。ただ明治文学の「全集」や「大系」の類のものを紐解けば、そこに収録されている作品や評論に容易に「狂人」を見出すことができる。例えば文壇で名を轟かせた森鷗外の早期「ドイツ三部作」はドイツでの留学体験をもとにしているが、先の二部には「狂人」が登場している。『舞姫』(1890)の女性主人公・エリスが最後には不治の「狂人」となり、『うたかたの記』では1度に三人の「狂人」が描かれていて、後世の人間から見ると、名実ともに「三狂」の作品である⁽⁷⁹⁾。

もしも早期の作品と評論の「狂人」がさらに多くの「比喩性」があったなら、後になればなるほど、「狂人」もますます「リアリティ」を備え、「狂人」の実体のイメージが文芸において確立しえたであろう。「狂人」の塑像があるだけでなく⁽⁸⁰⁾、「狂人の家」⁽⁸¹⁾、「狂人の音楽」⁽⁸²⁾、「狂人の文学」⁽⁸³⁾などの表題も至る所に見ることができる。その中でも最も注目を引くものは、明治35年即ち1902年3月1日、つまり周樹人「一行三十四名」が「神戸丸に乗って」——「大貞丸」ではない⁽⁸⁴⁾——横浜に到着する一か月前、雑誌『文芸倶楽部』には「狂人日記」と題された小説が掲載されていたことである。しかしこれはよく知られた二葉亭四迷(1864-1909)が翻訳したゴーゴリの同名の小説ではなく、日本人の創作で、作者の署名は「松原二十三階堂」となっている。これは19ページにわたり雑誌の紙面⁽⁸⁵⁾を占めた、決して短いとは言えない小説であり、以下の前置きには、明治文学史上初めて日本人たる「狂人」の日記を披露している。

一日郊外散歩の折、原上樹蔭の下にて此の日記を得たり。表紙はクロス仕立てにして枚数百余頁を綴りたるものなり。文章不羈縦横にして逸気奔騰、慷慨淋漓の所業より常識家の筆にあらず、依て中間数章を抜萃して假りに狂人日記と名づく⁽⁸⁶⁾。

この展開の方法は自然に魯迅の「狂人日記」を連想させるものである。しかし両者の主人公の「狂人」のありようは異なっている。魯迅の主人公は「被害妄想狂」で、松原二十三階堂の主人公は「誇大妄想狂」で、名を「在原」と言った。小説は主人公の「在原」が3月3日から7月10日の間の10編の日記を「抜萃」した形で構成されている。巻頭には「予は今日決心せり、予は今日限り断然予が出勤する所ろの世界貿易会社を辞職せんと欲す！」この会社には「小人と俗物」で満ちており、彼の「天下を経綸するの大手腕と陰陽を奕理するの大技倆」を見出せず、ただ「計算簿記の雑務」をやって時間を過ごした。このように、主人公が抱く「絶対無比の天才」であるとの意識は彼の置かれている現実と鋭く対立した。彼は狭い部屋に身を置き、借金取りから身を避け、自分が大きな貿易で巨万の富、或いは田畑を得たと想像した。彼は官僚になり、「将来の総理大臣」になることを妄想した。小説はこのような自己が肥大化した「狂人」の眼を通して、明治30年代の豪華奢侈の社会の蔓延を表現した。

作者は「二十三階堂」と号し、本名は松原岩五郎(1866-1935)で、彼は明治期、最下層を注視する新聞記者であった。この「狂人日記」は社会問題小説に属するものであるが、「狂人」を主人公とし正式に登場させたことで、明治文学の幕を開いた。

5年後の1907年3月1日、雑誌『趣味』に次の「狂人日記」が現れ、しかも3期連載され、これが人々によく知られた「二葉亭主人」(即ち二葉亭四迷)が翻訳したロシアの作家ゴーゴリの同名の小説であった。しかし一つあまり知られていない事実がある。それは二葉亭が雑誌『趣味』で「狂人日記」を連載するのと同時に、同年3月『新小説』で、これとは異なる「狂人」を描いた「二狂人」⁽⁸⁷⁾と題する、ロシア語から翻訳した作品を発表した。「二狂人」は「狂人日記」と比べると、後世には殆ど顧みられず、重視もされておらず、岩波書店出版の『二葉

亭四迷全集』の「解説」でさえもこの作品の原作を誤って記されている。そして『昔気質の地主』の部分翻訳と指摘され⁽⁸⁸⁾、ゴーゴリの作品と誤解されたが、先達のご指摘により⁽⁸⁹⁾、はじめてこれは「錯誤」に関する錯誤であったことがわかった。すなわち「二狂人」の原作はゴースキーの「錯誤」(ОШИБКА, 1895年)であった。しかしこの問題に関しては、筆者は別稿でまた詳述する予定である。

二葉亭が当時に出した「狂人」に関する二つの翻訳は、明治期の「狂人」文学を新たな高まりへと昇華させた。そしてこれとほぼ同時期に、「無極」と署名した最初の「狂人」に関する文学評論——「狂人論」も雑誌『帝国文学』に正式に登場した。

頃者我文壇は二葉亭主人の靈妙なる訳筆によりて新たに露西亜種の三狂人を得た。ゴースキーの「二狂人」及ゴーゴリの「狂人日記」の主人公である。「二狂人」は物凄い心理解剖で……⁽⁹⁰⁾

これらを比較すると、「狂人日記」は二狂人の様に物凄い、深刻の物ではない⁽⁹¹⁾。論者のこの読書体験は、この二つの作品が人に与える感覚と符号している。もしゴーゴリの作品に「涙を含んだ微笑」があれば⁽⁹²⁾、「二狂人」には「涙を含んだ微笑」があるだけでなく、「アンドレーエフ式の暗鬱」も描かれていた⁽⁹³⁾。それ故、後者は当時のインパクトと影響力は前者をはるかに凌いでいる。——しかし後の影響力は正反対である。翌年1月1日、二葉亭の翻訳集⁽⁹⁴⁾には「二狂人」など四編しか収録されておらず、「狂人日記」が収録されていないことがその有力な証左であろう。つまり「狂人論」は二編の作品に対して内容と創造の手法から高い評価を与えられているだけでなく、それらを美学的高度にまで押し上げ、初めて「狂人美」⁽⁹⁵⁾の概念を提起した。『帝国文学』は強大な影響力を持った雑誌で、この呼びかけは「狂人」創作を更に自覚的なものへと変化させた。

四年後、内田魯庵(1868-1929)が「小説脚本を通じて観たる現代社会」という長文に着手した時に、彼は『太陽』の応募懸賞小説を調べた時に、以下のことに気づいた。つまり「狂人小説も比例が多過ぎる感があり、描写内容も「アンドレーフの『血笑記』よりもヨリ以上に戦争の惨禍を憶起させるのを戦慄した」⁽⁹⁶⁾とある。

では、何故「狂人」がそれほどまでに数多く描かれたのであろうか。

七. 「狂人」を作り出す時代

文学作品での「狂人」は当時の社会の投影に過ぎなかった。これは「一日増しに狂人が殖えて行き、「世界は尽く狂人になつて」、「癲狂院」も足りない時代と、内田魯庵は述べている⁽⁹⁷⁾。

その原因を追究すると、まず「日清(1894-1895)」と「日露(1904-1905)」の二つの戦争が「狂人」を生み出したことが挙げられる。特に後者は、日本、ロシアに関わらず大量の精神異常者を作り出した⁽⁹⁸⁾。内田の言葉で言えば、「国誉を輝かした戦争に由て教へられたる賜物で

ある⁽⁹⁹⁾」。もう一つの原因は、近代産業社会の発達もたらした社会環境と精神的圧迫が作り出したものである。「機械の車輪の響が空気に充ち、石炭の煙が碧空を閉ざし、瓦斯や電気がチラクラするような世の中では人間は誰でもヒステリーになるのが当然で、此の社会一般のヒステリー傾向を世紀末と云い廃頹時代と呼ぶのであるから」⁽¹⁰⁰⁾とある。

以上の二点を除くと、特筆すべきは思想・精神に関わる「狂人」とその成り立ちである。明治憲法の公布(1889年2月11日)とその実施(1890年11月29日)及び『教育勅語』(1890年10月30日)の公布に伴って、日本は天皇を中心とする近代国家体制を正式に確立し、明治維新以来の文明開化は、殖産興業、富国強兵等の効果として表れ始めた。これは成長期の明治国家にあって、官民一体で強国となる夢を共有していた。そして直後の「日清戦争」は明治の国家体制の力が試されたと同時に、日本全体が自分自身の実力を自覚する契機となった。そして次の目標に狙いを定め、帝国主義の道のりで「臥薪嘗胆」の十年が始まったのである。八幡製鉄所や軍事工場の建造や、大規模な巨大戦艦が作れるようになったと同時に、民間製造業も発達し始めた。さらに日英同盟が締結され(1902年)、世界の一等国と肩を並べ、その結果、日露戦争にも勝利した。台湾を割譲した後、「満鉄」を設立し(1906年)、韓国を併合するのなど(1910年)、世界に向けた一連のアピールは、すなわち日露戦争前後の所謂「大日本帝国」の「膨張」であった。この国家の「膨張」はナショナリズムの奇形的発展を導き、国を挙げて「在原」式の「金儲け」の絵空事から国家主義の狂乱に陥れた。幸徳秋水は「世の所謂志士愛国者みな髪豎ち眦裂くるの時に於て」⁽¹⁰¹⁾、この時代に残した最大の献辞は「狂」の一字であった。彼は「我國民を膨張せしめよ、我版図を拡張せよ、大帝国を建設せよ、我國民を発揚せよ、我国旗をして光榮あらしめよ」⁽¹⁰²⁾という鼓吹を「國民の獸性を煽揚し」⁽¹⁰³⁾た「狂顛的な愛国主義」⁽¹⁰⁴⁾とし、これらの人々を「愛国狂」⁽¹⁰⁵⁾と称し、且つ「外国に対する愛国主義の最高潮は、内治に於ける罪惡の最高潮を意味する」⁽¹⁰⁶⁾と鋭く指摘した。これにより所謂「愛国心」が一種の強制的な奴隷道徳に変質した時、まさに内田魯庵が指摘したように、「恚ういう道徳は國民を墮落さするか或は狂人化するかの二つである」となった⁽¹⁰⁷⁾。

これはすでに一つの「世を挙つて国家主義帝国主義に狂奔」⁽¹⁰⁸⁾し、「獸性の愛国」⁽¹⁰⁹⁾を製造する狂った時代であり、一方で精神が極度に窒息した「閉塞」の時代でもあった。少数の醒めた鋭敏な人のみが「時代閉塞の現状」⁽¹¹⁰⁾を打破しようと試みた。彼らもかつて国家の熱狂的な同調者であり、衷心からの擁護者であり、彼らは国家の繁栄富強を謳歌し、「日本主義」⁽¹¹¹⁾を賛美し、文学での「國民の性情を表現する」⁽¹¹²⁾ことを主張し、「時代精神と大文学」⁽¹¹³⁾を叫んだ。それらは「国権」と「民権」が並行して衝突することがなく、個人の精神の発展が国家の上昇と同調したからであった。しかし、二度の戦争を経て、彼らの感じ方にも変化が生じた。つまり、この国家は自分が望んだ国家なのであろうか。自己に内包されている「人」はこの国家ではどのような位置にいるのであろうか。この国家には魂はあるのか、といった問いかけが生まれた。そこで、彼らは「人」即ち「精神と理想」の問題を、「国家」という物質的な実体

の前に据え置き、「個人」の存在価値を確立し、且つ「天才」、「詩人」、「精神」、「価値創造」等をこの「個人」の内側に充填した。そしてある日、彼らが「国家と詩人」に関する宣言を発表し、「人、詩人がいなければ、国家はなにもならない！」⁽¹¹⁴⁾と直接この狂った国家に大声で叫ぶことになった。ここで明らかのように、この過程において、「ニーチェ」は外部から導入され、「個人」を明らかにする啓示と導入の役割を果たしたに過ぎなかった。

かえって世の中の人々は、彼らは気のふれた人間が出鱈目を言い、これは上述した「ニーチェ」が「狂人」の扱いを受けたことが原因であるとした。興味深いのは、世の中が「狂人」に対して絶え間ない糾弾していたにもかかわらず、これらの「狂人」達はあっさりと「狂人」を自認していたことである。高山樗牛は迫害に遭った日本の日蓮宗始祖の日蓮上人に自らをなぞらえ、彼は僧侶の口を借りて「嗚呼我が蓮長（筆者案ずるに、日蓮のこと）遂に狂せり」⁽¹¹⁵⁾と言った。これと同様の意味において、国家主義に反対した著名なキリスト教徒の内村鑑三（1861-1930）は何度も自分が「狂人」であると宣言し⁽¹¹⁶⁾、彼は『教育勅語』に「拝礼」することを拒否した所謂「不敬事件」を社会に対して引き起こした。ここから、「狂」は時代の象徴の一種であり、「個人主義」者の精神的特質を表す一部分であったと言えるだろう。「彼は晩年に『此の生の憂苦を免るるの道にたゞ三つあり。永き恋か早き死か、然らざれば狂……彼は早き死と永き恋の外に更に狂を加えた。あゝ狂乎、予にも取りてはこの樗牛が詞に、云ひ知らぬ哀れさを覚ゆるものである』」⁽¹¹⁷⁾。これは高山樗牛の実弟の齋藤信策が彼の為に書いた追悼文である。確かに、それは二種類の「狂人」、つまり「庸衆」と「哲人」が生み出され、後者、つまり「哲人」が消滅した時代であった。或いは、周樹人が仙台の教室であの耳をつんざくような「万歳」の歓声を聞いた時、彼は「狂人」に対して既に明晰な識別力を有していたのかも知れない。

八. 周樹人の選択

遺漏が多いことは言うまでもないが、以上が「狂人」言説史の概略である。しかし明治の言語史、思想史、文学史乃至は世相と時代精神において、至る所に「狂人」の影が現れているのは、争うべくもない事実であると言えるだろう。周樹人の留学期間全般にわたって、「狂人」言説が精神的洗礼を経て、自我の確立過程における一つの有機的な部分をなしたことは明らかである。総体的に言えば、「ニーチェ」、「シュティルナー」を目印とした「個人主義」と文芸創作・評論が、「狂人」に接近、対面させた可能性が最も大きい。

周樹人はまず精神上の「明治のニーチェ」の論争に参加し、「偏見なしにこのことばの実質を考え」⁽¹¹⁸⁾、明確な価値選択をしたうえで、「ニーチェ」を彼の文章に取り込んだ。筆者が2012年秋に初めて『文化偏至論』を論じた時、「ドイツ人のニーチェ氏」を紹介した際に引用した『ツアラトウストラはかく語りき』は、先学が指摘したように、周樹人本人がニーチェの

原書の一章を「優れた要約」をしたのではなく、前述の桑木巖翼の『ニーチェ氏論理説一斑』から写し取ってきたことを確認した⁽¹¹⁹⁾。前述のように、桑木巖翼はニーチェの価値を認めてはおらず、この本から「ニーチェ」を肯定する内容を選ぼうとするなら、桑木巖翼が「狂人」を口実に「ニーチェ」を否定していることを乗り越えなければならなかった。この選択は、「狂人」を排斥していた主流の議論を、周樹人が切り捨てたことを意味している。

次に、『文化偏至論』で「個人という言葉……」から「個人主義」を擁護したことを引き出した後、続いて書かれた「ドイツ人のシュティルナー……」以下長文260字（中国語）の段落は、完全に前出の煙山専太郎の『無政府主義を論ず』⁽¹²⁰⁾に基づいている。前述のように、同じ時期に煙山専太郎を訳した中文書は18種類にもものぼっていたが、しかしその中からシュティルナーが正確な翻訳を通してその「個人主義」を明らかにした文脈を受け入れたのは周樹人だけであり、その着眼点は当時の中国革命党の人々とは完全に異なっていた。彼はそれらの所謂「実行的」主張を重視せず、「理論的」な力を重視した——この点は、彼が現実でとった行動と完全に一致する——つまり、彼は「無政府主義」の言葉から「シュティルナー」を分離し、精神革命に極めて重要な「極端な個人主義」を明らかにし、それと同時に「狂人」を正面から解釈する言葉を手に入れたのである。

第三の点は、周樹人と文学の世界における「狂人」の関係である。たとえ本論が及ぶ所に限っても、明らかに断言できる。つまり、この世界で、日本語訳のゴーゴリの「狂人日記」一篇だけでなく、「狂人」も九等の文官の「ポプリシチン」に止まらず、更に「在原」、「クラフツォフ」と「ヤロスラーフツェフ」⁽¹²¹⁾及び内田魯庵が見て「戦慄」させられたあれらの「狂人」がおり、更に文学評論が展開した「狂人美学論」がある。これらの周樹人を取り囲む「狂人」たちは、ゴーゴリを除くと、その他は周樹人と関係がないのであろうか。明らかに、どの行、どのページにでも、彼に「狂人」が審美対象の意義をなすことを教え、彼も真にその意義を把握している。

第四に、「狂人」が直接文章に入ったことは、周樹人が「狂人」の価値に対する最終判断を完成したことを意味している。彼は「ニーチェ」と「無政府主義」に対する包圍網や、殲滅の声の中で、「狂人」とはその実、「ニーチェ」と「シュティルナー」のような「個人主義の英傑」が圧迫を受けた化身であるとみなされ、英雄と凡庸の対峙において、「狂人」は終始「英雄」の側に身を置いていた。バイロンもそうであり、シュレーもそうである。その証拠に、『摩羅詩力説』第六章に「詩人の心には、早くも反抗の兆しが芽生え始めたのである」というシュレーのセリフを紹介している。その後、小説を書き、それで得た金で、8人の友人に馳走を振る舞い、「気違いシュレー」のあだ名を付けられてここを去ったと。北岡正子の検証に拠ると、この段落は浜田佳澄の『シュレー』（第二章）から取材している⁽¹²²⁾。彼が取り入れた理由は、これらの「狂人」の価値に対する共通認識のためである。これにより、「狂人」も「天才」、「詩人」、「精神世界の戦士」と同列になり、彼らの担い手となった。

その意義において、齋藤信策（野の人）を提起しなければならないであろう。彼は文章レベルにおいて最も実証的で、明治期で「個としての人間の確立を主張した言説のなかで最も魯迅の文章と親近性が観られる」⁽¹²³⁾者の一人であった。ここには更に「親近性」の証左を加えることを妨げない。即ち「狂者の教」である。「健全の文明は美しき名なりき。されどもこれが為に、活ける人は死すべきことゝなりぬ。これ誠に狂者の教により、新しき命を掬すべき時にあらずや。知らずや、狂者の文明とは、これ自らの立てる所を掘りて泉を求め、新しき理想によりて、自ら住むべき世界を造るの謂なるを」⁽¹²⁴⁾とある。これは『摩羅詩力説』の初めの部分で言及している「新しき泉は深淵より湧き出づらむ」⁽¹²⁵⁾及び文中で言及している「悪魔とは真理を語るもの」⁽¹²⁶⁾の意味合いと完全に一致している。彼らは「哲人」、「天才」、「新しき泉」を追求し、この道のりで「狂人」と「悪魔」に遭遇し、「教」或いは「真理」と名づけられた啓示を得たのである。

九. 狂人の誕生とその意義

以上の考察から、周樹人は日本で一つの「狂人」の雛形を持って帰国したと言えるであろう。これは自己を構築する過程での「生成物」ともいえるものであった。病理的知識、精神的内核及び芸術的対象を作り出し、表現する文学様式がすべて彼の内面に備わっていたなかで、被害妄想症に罹患した「いとこ」が彼の扉をたたき⁽¹²⁷⁾、中国的「担い手」^{キャリアー}を提供するのを待つだけであった。

形式上から見ると、魯迅の「狂人」は、外国思想と文芸を中国現代文学に移植し、それを本土化した結果である。しかし彼個人について言えば、内面化してしまった「真の人間」を、中国に持ち帰り、別の「時代閉塞」に遭わせた結果となった。「時代閉塞」が「狂人」を作り出したことは、前に既に見てきた。これは彼に置き換えると、彼はこれを「寂寞」と名付けた試練を受けた⁽¹²⁸⁾。現実的には、人が縊死したS会館で古い碑文を写し、精神上も「まもなく窒息してしまう」ほどの「鉄の部屋」⁽¹²⁹⁾に身を置くものの、意識がまたあるし、「精神の糸ですでに過ぎ去った寂寞の時をつなぎ」「忘れきれぬことが苦しい」⁽¹³⁰⁾、「この寂寞はさらに日一日と成長し、大きな毒蛇のように、私の魂にからみついた」⁽¹³¹⁾——これが彼の記憶の中の「真の人間」と現実の衝突が彼にもたらした苦痛の体験であった。これにより、「狂人」登場の声は、「真の人間」が声をあげる現実的形態であると解釈することができよう。筆者が思うに、これは「狂人」の誕生の内的なロジックである。この「狂人」は、時代の「狂人」に関する言説を凝集したものであり、作者がそれを内面化したのち、再び創造した産物である。それが魯迅の文学的精神の典型的な人物となったのは、必然であった。

作品の最後に、「ほんとうの人間の前に顔が出せたものか（原語、「難見真的人）」⁽¹³²⁾の一句は、「狂人」が覚めた後「真の人間」の記憶に対する喚起であり、同時に作者の「完全に忘

れられないことが苦し」い記憶でもある。この言葉はこれまで「狂人日記」の解読のキーポイントであるが、しかしこの「真の人間」がどこから出たのかは探し出せない。今明らかにできるのも、やはり作者が当時熟読したことのある文章である。

ニイチェまた曰く、幸福なる生活は、到底不可能の事に属す、人間の到達し得べき最高の生活は英雄的生活なり。衆人の為に最大の苦痛と戦ふ所の生活なり。真の人間出でて、始めて吾人をして真の人間たらしむることを得べし。所謂真の人間とは、一躍直ちに大自然となるべき人なり。彼等は自己の事業に據つてよりも寧ろ自己の人物によりて、世に教ふる所の人なり。その思想家たると、芸術家たると、詩人たると固より問ふを須あざる所なり。

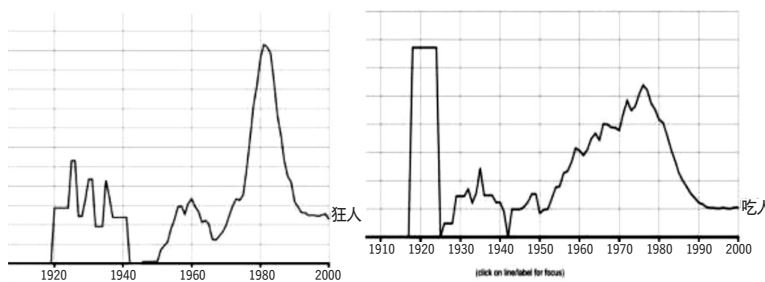
かゝる人間は則ち歴史の目的とする所なり⁽¹³³⁾ (傍点は原文のまま)。

ここから「狂人」と「真の人間」が実は血の繋がった実の兄弟であると証明することができる。「狂人」の誕生は、「狂者の教」が中国に現れたことを意味し、彼は「喫人」時代がまさに終わろうかとしていることを宣言するだけでなく、「真の人間」が必ず誕生することを宣言している。これにより、本質から言えば、「狂人日記」は「人」の誕生を宣言するものであった。

「狂人」の前に、魯迅その人以外に、中国には「人」に関する、「個人」に関する言説がほとんど存在しなかった⁽¹³⁴⁾。周樹人が「ニーチェ」を発見し、力を尽くして「個人」を擁護した時、彼の恩師の章太炎(1869-1936)が、彼と同調してある種の意義を見出していたが、「所謂我見たるものは、自信であり利己ではなく、特に厚自尊貴の風があった。ニーチェの所謂超人とは、これに近いものである」⁽¹³⁵⁾というような短い一文があるだけであった。梁啓超(1873-1929)は近代の「国民国家」理論に熱中したが、彼の「新民」には「個人」が含まれていない。彼がニーチェをとりあげて「自己本位説は、その言説の弊害がドイツのニーチェにより極まる」⁽¹³⁶⁾と攻撃したのは1919年の事で、「狂人」言説は言を俟たない。故・范伯群先生は「中国の文学史上、文学形象の「狂人史」を研究しなければならないことを」提唱したが、1917年以前の近代文学においてはただ陳景韓の『催醒術』一篇が見本となるだけであった⁽¹³⁷⁾。つまり中国の「狂人」言説史は魯迅の「狂人日記」の後から始まるのである。この点は以下の図が示す Google のデータからも裏付けられている。

Google における「狂人」と「喫人」

<https://books.google.com/ngrams>



現在までのところ、「狂人日記」を構成する二つの核心的要素、つまり「喫人」と「狂人」の双方のイメージは共に孤立した存在ではなく、作者が留学した時期の外国に関係する言説と「史」的属性が関連しており、われわれはこの作品に対して新たに詳細に観察し、評論する余地があると思われる。具体的には、「狂人日記」には中国文学の領域を広げ、狭隘で閉鎖された一国文学史観を打ち破るという意義を有している。中国文学にとっては、「狂人日記」の開拓性の意義と基本精神は「拿来主義」であり、結果から言えば、以下にみるように作者の初志と符合する。

明哲の士が、世界の大勢を洞察し、比較検討を加え、その扁頗を去って、その神髄を得、これを国内に実施したならば、必ずやびったりと合って、間然するところがないにちかない。外は世界の思潮に落伍しない上に、内は固有の血脈を失わないであろうし、今を取りて古に復し、別に新しい主義を起こして、人生の意義を深遠にしたなら、国民の自覚が生まれ、個性は発展して、砂の集まった国は、これにより、一転して人間の国になるであろう。人間の国が建設され、ここに始めて前古に比類なく雄大となり、屹然として独り天下に現れ、もはや浅薄凡庸な事物など、問題なく消えてなくなるだろう。(『墳・文化偏至論』⁽¹³⁸⁾)

「狂人日記」の開山の所以は、この「今を取りて古に復し、別に新しい主義を起てる」という真の自信があるからであろう。

そもそも国民の発展には、懐古ということは大きな役割を果たすのであるが、この懐古の懐は、理路整然と、鏡に照らして見るように、自分の考えをはっきりさせることである。絶えず前進すると共に、絶えず後ろを振り返って見ることである。絶えず光明に満ちた遠い前途に向かって進むと共に、絶えず燦然と光を放つ古い昔の物を思い返すことである。かくしてその新しさは、日に日に新しくなり、その古も生命を失わないのである。もしも、この道理を知らないで、みだりに自慢して、自己満足していると、無明の闇はこの瞬間から始まるであろう。(『墳・摩羅詩力説』⁽¹³⁹⁾)

「狂人日記」がこの百年の間も衰えを見せない所以は、この「理路整然と、鏡に照らして見る」文化的自覚があることによる。文化における自信と自覚は「狂人日記」が百年後の現在に与えた最大の啓示ではないであろうか。

〔注〕

- (1) 張夢陽『中国鲁迅学通史(下卷一)』、広東教育出版社、2005年、270頁。
- (2) この問題に関しては、拙文「明治時代「食人」言説と鲁迅的〈狂人日記〉」中国社会科学院文学研究所編『文学评论』2012年1期を参照。
- (3) 以上は漢語大字典編集委員会編纂『汉语大字典(第二版)』の「狂」字に関する解釈を参照。四川辞書出版社、2010年、第3巻1431-1432頁
- (4) 渡部温標注訂正『康熙字典』、東京：講談社、昭和五十二年復刻版、1605頁を参照。
- (5) 商務印書館編集部編『辞源(合訂本)』商務印書館、1988年、1080-1081頁を参照。

- (6) 李白『廬山謠寄盧侍御虛舟』。760年の作、『辞海』にもこの句が用例として収められている。
- (7) 統計使用版本、諸橋漱次著『大漢和辞典』修訂第二版、東京：大修館書店、平成三年、第七卷676-680頁。
- (8) 統計使用版本、大詞典編集委員会漢語大詞典編纂所編纂『漢語大詞典』、上海：漢語大詞典出版社、1990年、第5巻12-25頁。
- (9) 「和製漢語」は通常中国本土のものではなく、日本が作った漢字語彙を指す。佐藤武義編「和製漢語」(遠藤好英、加藤正信、佐藤武義、飛田良文、前田富祺、村上雅孝編『漢字百科大事典』、東京：明治書院、1996年)はこれらの語句を収めていない。
- (10) 『漢字百科大事典』983、984頁。
- (11) 統計版本、飛田良文編『哲学字彙訳語総索引』笠間索引叢刊72、有限會社笠間書院、昭和五十四年を使用。
- (12) 統計使用版本、井上哲次郎、元良勇次郎、中島力造共著『英獨佛和 哲学字彙』(*Dictionary of English, German, and French Philosophical Terms with Japanese Equivalents*)、東京：丸善株式會社、明治四十五年。
- (13) 前掲『英獨佛和 哲学字彙』、134頁参照。
- (14) 魯迅『南腔北調集・わたしはどのようにして小説を書きはじめてか』、『魯迅全集』第六巻、東京：学習研究社、昭和六十年、342頁。
- (15) この問題に関しては、以下の文献を参考、「魯迅解剖学ノート」、魯迅・東北大学留学百周年史編集委員会編、『魯迅と仙台 東北大学留学百周年』、東北大学出版会、2004年、90-113頁。坂井建雄「明治後期の解剖学教育—魯迅と藤野先生の周辺」、日本解剖学会『解剖学雑誌』、82巻1号、2007年。阿部兼也「魯迅の解剖学ノートに対する藤野教授の添削について」、東洋大学中国学会編『白山中国学』12号、2006年3月。解沢春訳『魯迅と藤野先生』、北京：中国華僑出版社、2008年。
- (16) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第2版、東京：小学館、2000年12月-2002年12月、第4巻452頁。
- (17) 筆者が目撃したものは1819年版、日本国立国会図書館(<http://dl.ndl.go.jp/titleThumb/info/ndlj/pid/2541616>)
- (18) 「方技部十八) 疾病四」、『古事類苑』、洋巻第1巻1472頁。
- (19) 〔伊呂波字類抄 毛病瘡〕、『古事類苑』、洋巻第1巻、1473頁、1475頁。
- (20) 同上、1475頁。
- (21) 1919年12月19日朝刊第三版「独帝を精神障害者扱」参照、これは104番目の狂人に関する記事である。『読売新聞』データベース、ヨミダス歴史館。
- (22) 標題は「物騒なる狂人逃走 昨夜巢鴨病院より 非常の暴れ者市中の大警戒」『朝日新聞記事データベース、聞蔵II』。
- (23) 統計範囲、1879年3月6日から1897年12月31日、出所は同上。
- (24) 統計範囲、1898年1月26日から1907年12月22日、出所は同上。
- (25) 統計範囲、1908年1月23日から1912年6月5日、出所は同上。
- (26) 「法律部四十四) 下編上 放火」、『古事類苑』洋巻第2巻785頁。
- (27) 「法律部四十五) 下編上 殺傷」、『古事類苑』洋巻第1巻855頁。
- (28) 「法律部二十三) 中編 殺傷」、『古事類苑』洋巻第2巻885頁。
- (29) 「法律部三十一) 下編上 法律總載」『古事類苑』洋巻、第2巻21頁。
- (30) 宮崎滔天(寅藏)著『狂人譚』、東京：国光書房、明治三十五年。
- (31) 高山林次郎「文明批評家としての文学者(本邦文明の側面評)」、『太陽』、明治三十四年一月五日。樗牛生「美的生活を論ず」、『太陽』明治三十四年八月五日。本文参照『明治文學全集40』、筑摩書房、昭和四十五年。
- (32) 登張竹風「美的生活とニイチエ」、『帝國文学』明治三十四年九月一日、前掲『明治文學全集

- 40』、311頁。
- (33) 以上は入沢達吉と森鷗外に関することは、高松敏男著『ニーチェから日本近代文学へ』を参照、東京：幻想社、1981年、7頁
- (34) 吉田静致、「ニーチェ氏の哲学（哲学史上第二期の懷疑論）」『哲学雑誌』明治三十二年第一期、ここでは以下から引用した。高松敏男・西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜・II資料文献篇』、『ニーチェ全集』（別巻）、東京：白水社、1982年、第307頁。
- (35) 長谷川天溪「ニーツエの哲学（承前）」、『早稲田學報』第33號）、明治三十二年十一月、ここでは以下から引用した。前掲『日本人のニーチェ研究譜・II資料文献篇』、332頁。
- (36) 長谷川天溪「ニーツエの哲学」、『早稲田學報』第30號、明治三十二年八月、ここでは以下から引用した。前掲『日本人のニーチェ研究譜・II資料文献篇』、323頁。
- (37) 桑木敵翼『ニーチェ氏倫理説一斑』、東京：育成會、明治35（1902）年、186頁。
- (38) 同上。
- (39) 峰島旭雄編「年譜・桑木敵翼」、『明治哲学思想集』、『明治文学全集80』、東京：筑摩書房、昭和四十九年、437頁。
- (40) 藪の子「精神病学上よりニーチェを評す（ニーチェは発狂者なり）」、『讀賣新聞』、明治三十六年四月十二日日曜附録。
- (41) 西尾幹二「この九十年の展開」、前出『日本人のニーチェ研究譜・II資料文献篇』、524頁。
- (42) 前出『ニーチェから日本近代文学へ』、13頁。
- (43) 伊福部隆彦編、「生田長江年譜」、『高山樗牛 島村抱月 片上伸 生田長江集』、『現代日本文学全集16』、422頁、東京：筑摩書房、昭和四十二年。
- (44) 生田星郊「輕佻の意義」『明星』卯歳第八號、明治三十六年八月、第68頁。
- (45) 伊藤虎丸『魯迅と日本人—アジアの近代と「個」の思想』、東京：朝日新聞社、1983年、49、54頁を参照。
- (46) 前掲「精神病学上よりニーチェを評す（ニーチェは発狂者なり）」。
- (47) 『馬骨人言』は明治三十四年十月十三日から明治三十四年十一月七日『讀賣新聞』に連載され、26日にも及ぶ。
- (48) 「馬骨人言・天才」、『讀賣新聞』、明治三十四年十一月六日第一版。
- (49) 齋藤信策「天才と現代の文明（天才崇拜の意義を明かにす）」、『帝國文學』第十卷第十一号、明治三十七年十一月十日、その後、『藝術と人生』（東京：昭文堂、明治四十年六月）に収録する際、「天才とは何ぞや」と改題。
- (50) 前掲『哲学字彙訳語総索引』、150頁。
- (51) 前掲『英獨佛和 哲学字彙』、103頁参照。
- (52) 煙山専太郎著、『近世無政府主義』、東京：博文館、明治三十五年四月廿八日発行。
- (53) 前掲『近世無政府主義』、2頁。
- (54) 前掲『近世無政府主義』、1～2頁。
- (55) 嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』、東京：研文出版、1994年11月、48頁。
- (56) 同上。
- (57) 煙山専太郎『近世無政府主義』と魯迅、近代中国の關係は、拙文「留学生周樹人「個人」語境中的「斯契納爾」—兼談「蚊学士」、煙山専太郎』、『東岳論叢』2015年第6期参照のこと。
- (58) 蚊学士「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾四号、明治三十五年一月一日、28頁。
- (59) 前掲「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾七号、明治三十五年二月廿日、25頁。
- (60) 同上、24頁。
- (61) 前掲『近世無政府主義』、302頁。
- (62) 前掲「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾七号、24-25頁。
- (63) 前掲『近世無政府主義』、294～302頁。
- (64) 『日本人』第百五拾七号、第百五拾九号連載「無政府主義を論ず」を参照。

- (65) 前掲『近世無政府主義』、369～383頁を参照。
- (66) 前掲「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾七号、26頁。
- (67) 前掲『近世無政府主義』、369～370頁。
- (68) 同上、370頁。
- (69) ニーチェ研究の基本的文献である、高松敏男著『ニーチェから日本近代文学へ』と高松敏男・西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜』には、煙山専太郎のニーチェに対する紹介がない。
- (70) 前掲「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾九号、25頁。
- (71) この文章の後に署名日時は1907年8月である。1908年6月に『河南』第5号で発表した時は、令飛と署名。
- (72) 魯迅『墳・文化偏至論』、前掲『魯迅全集』第1巻、81頁。
- (73) 久津見蕨村『無政府主義』、東京：平民書房、明治三十九年十一月、2、53、114頁を参照。
- (74) 同上、4～5頁を参照。
- (75) 久津見蕨村「文部省とニイテエニズム（明治四十五年五月稿）」、『久津見蕨村集』、東京：久津見蕨村集刊行會、大正十五年八月、591頁。
- (76) 大杉栄、「正気の狂人」、松田道雄編『アナーキズム』、現代日本思想大系 16、東京：筑摩書房、1963年10月、175頁
- (77) 同上、189頁。
- (78) 以上の統計は日本国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」から分類を行った。
- (79) 長谷川泉「森鷗外の人と文学」、舞姫・山椒大夫他4編』、東京：旺文社、昭和四十七年、192頁。
- (80) 米原雲雪、雕塑「狂人」、『美術新報』、明治三十七年一月十二日、第五版、附照片。
- (81) 児玉花外、「狂人の家」、『太陽』、明治四十一年一月一日、95-96頁。
- (82) 北原白秋、「狂人の音楽」（1908）、『邪宗門』、『明治反自然派文学集（一）』、『明治文学全集 74』、筑摩書房、昭和四十一年十二月十日、23-25頁。
- (83) 「時報・狂人と文学」、『文藝俱樂部』、明治38（1908）年十二月一日、318頁。
- (84) 北岡正子「魯迅の弘文学院入学」、『魯迅 日本という異文化の中で——弘文学院入学から「退学」事件まで』、関西大学出版部、平成十三年三月、35-43頁を参照。
- (85) 松原二十三階堂「狂人日記」、『文芸俱樂部』、129頁、明治三十五年三月一日、129-147頁。
- (86) 同上、129頁
- (87) ゴーリキイ原作、二葉亭主人訳「二狂人」、『新小説』明治四十年第三号。本論で使用した版本は以下の書籍に収められている。二葉亭主人『カルコ集』、東京：春陽堂刊、明治四十一年一月一日。
- (88) 「解説」、河野與一、中村光夫編集『二葉亭四迷全集』第4巻、岩波書店、昭和三十九年十二月、439頁。
- (89) この問題について南京師範大学汪介之教授のご指摘にここで心から感謝の意を表す。
- (90) 無極「狂人論」、『帝國文學』第十三卷第十七号、明治四十年七月十日、140頁。
- (91) 同上、142頁。
- (92) 魯迅『且介亭雜文二集・ほとんど何事も起こらなかった悲劇』、前掲『魯迅全集』第八巻、414頁。
- (93) 魯迅『且介亭雜文二集・『中国新文学大系』小説二集序』、同上、272頁。
- (94) 二葉亭主人『カルコ集』、東京：春陽堂刊、明治四十一年一月一日。
- (95) 前掲「狂人論」、145頁。
- (96) 内田魯庵「小説脚本を通じて観たる現代社会」、初刊『太陽』、明治四十四年二月十五日、以上は、稻垣達郎編『内田魯庵集』、東京：筑摩書房、昭和五十三年三月、257頁。
- (97) 同上。
日、以上は、稻垣達郎編『内田魯庵集』、東京：筑摩書房、昭和五十三年三月、257頁、257頁、

258頁から引用した。

- (98) 内田魯庵『樓上雑話』、前出『内田魯庵集』、295頁参照。
- (99) 前掲「小説脚本を通じて観たる現代社会」、257頁。
- (100) 内田魯庵、『気まぐれ日記』、前掲『内田魯庵集』、308頁。
- (101) 幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』、飛鳥井雅道編集『幸徳秋水集』、東京：筑摩書房、1975年11月、34頁。
- (102) 同上、36頁。
- (103) 同上、65頁。
- (104) 同上、46頁。
- (105) 同上、42頁。
- (106) 同上、42頁。
- (107) 前掲「小説脚本を通じて観たる現代社会」、258頁。
- (108) 登張竹風「フリイドリヒ、ニイチエを論ず」、『帝國文學』七卷、明治三十四年六月至八月、十一月號、前掲『明治文學全集40』、297頁。
- (109) 魯迅『集外集拾遺補編・「破悪声論」』、前掲『魯迅全集』第十卷、66頁。
- (110) 石川啄木「時代閉塞の現状」(1910年)一文、前出『明治文學全集52』参照。
- (111) 高山林次郎、「日本主義を賛す」、『太陽』第三卷第十三号、明治三十年六月二十日。
- (112) 高山林次郎、「非国民的小説をを難す」、『太陽』第四卷第七号、明治三十一年四月五日。
- (113) 高山林次郎、「時代の精神と大文学」、『太陽』第五卷第四号、明治三十二年二月二十日。
- (114) 野の人、「国家と詩人」、『帝國文學』第九卷六号、明治三十六年六月十日。
- (115) 高山樗牛、「日蓮上人とは如何なる人ぞ」、『太陽』第八卷第四号、明治三十五年四月、前掲『明治文學全集40』、88頁。
- (116) 内村鑑三、『基督信徒の慰』、『後世への最大遺物』、『現代日本文學大系2』、東京：筑摩書房、昭和四十七年七月参照。
- (117) 齋藤信策、「亡兄高山樗牛」、『中央公論』、明治四十年六月、姉崎正治、小山鼎浦編纂『哲人何処にありや』、東京：博文館、大正二年、437頁。
- (118) 魯迅『墳・「文化偏至論」』、前掲『魯迅全集』第1卷、75頁。
- (119) 拙文「留学生周樹人周辺の「尼采」及其周辺」、『東岳論叢』2014年第3期参照。
- (120) 前掲「留学生周樹人「個人」語境中的「斯契納爾」—兼談「蚊学士」、煙山專太郎」参照。
- (121) 両者とも『二狂人』の主人公。
- (122) 北岡正子、『魯迅文學の淵源を探る—「摩羅詩力説」材源考』、東京：汲古書院、2015年6月、111頁。
- (123) 中島長文、『ふくろうの声—魯迅の近代』、東京：平凡社、2001年、20頁。その他、本論文関係のある伊藤虎丸『魯迅与日本人』、李冬木訳、河北教育出版社、2000年、清水賢一郎「国家と詩人—魯迅と明治のイプセン」、東京大學東洋文化研究所編『東洋文化』74号、1994年3月。
- (124) 齋藤信策「狂者の教」、『帝國文學』第九卷第七号、明治三十六年七月十日、118頁。
- (125) 魯迅『墳・「摩羅詩力説」』、前掲『魯迅全集』第1卷、94頁。
- (126) 同上、122頁。
- (127) 周遐寿の文章を参照、『狂人は誰』、『魯迅小説里の人物』、北京：人民文学出版社、1957年。
- (128) 魯迅『呐喊・「呐喊」自序』、前掲『魯迅全集』第2卷、9頁。
- (129) 同上、13頁。
- (130) 同上、9頁。
- (131) 同上、12頁。
- (132) 魯迅『呐喊・「狂人日記」』、前掲『魯迅全集』第2卷、31頁。
- (133) 登張竹風「フリイドリヒ、ニイチエを論ず」、前掲『明治文學全集40』、300頁。
- (134) 董炳月がこの問題について検証を行った。『「同文」的現代轉換—日語借詞中的思想与文学』、

第三章 「個人」与「個人主義」参照。北京：崑崙出版社、2012年。

- (135) 湯志鈞編『章太炎年譜長編』卷三、光緒三十三年丁未、北京：中華書局、2013年、245頁。
- (136) 梁啓超『歐游中之一般觀察及一般感想』、『飲冰室專集』第7冊、北京：中華書局、1989年、9頁。
- (137) 范伯群「「催醒術」、1909年發表的「狂人日記」—兼談「名報人」陳景韓在早期啓蒙時段的文學成就」、『江蘇大學學報』（社會科學版）2014年第5期。
- (138) 前掲『魯迅全集』第1卷、84頁。
- (139) 前掲『魯迅全集』第1卷、97頁。

(り とう ぼく 中国学科)

2018年11月15日受理